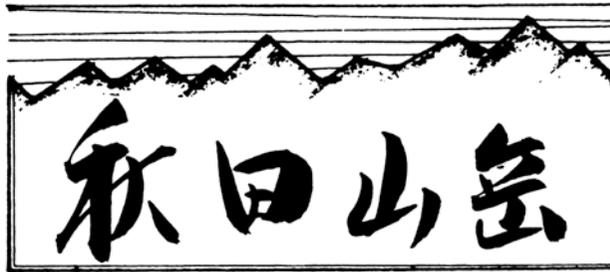


2023



令和5年1月 発行

No. 125

社団法人 日本山岳会秋田支部

秋田市土崎港北
5-3-40 鎌田方

TEL・018-846-8150

発行 秋田支部
編集 鈴木裕子

進藤昭氏 追悼

進藤昭名誉顧問を偲ぶ 長岩嘉悦

進藤大先輩の人柄・性格は、一口で言ったら温厚誠実な人であると思います。

進藤さんのお付き合いは、昭和三十年(一九五五年)から県岳連のお手伝いして、進藤さんが昭和三十二年十月に、第十二回静岡国体に横手高校の監督として四名の選手を引率したことが縁で始まったのです。

私は横手高校のOBで、横手美入野岳友会を昭和二十九年に創立した時のメンバーの一人です。

進藤さんの山への親しみは、父親からの影響で、幼稚園の頃から小さなリュックを背負って、里山に登り、キャンプ生活も体験した、初めて高い山に登ったのは、小学三年の時、蔵王山に登ったことだと、「支部設立五十周年記念式典」の講話で述べています。

スキーが上手で、高齢になっても、手形山にスキーを滑りに行ってきたと、手紙で知らされたものです。



進藤さんとの山行は、ほとんど記憶はないですが、所属団体が違うからでしょう。高齢になつてから、平成八年七月に岡田支部長の古希祝賀登山で、沼沢山、岡田山、太平山(黒森山)と一緒に参加しています。

平成十一年設立四十周年記念祝賀会(男鹿磯乃家)と、平成二十一年の五十周年記念祝賀会(鶴の湯温泉)が思い出されます。

平成二十六年十一月五日、五十五年記念祝賀会(秋田ビューホテル)でお会いしたのが最後でした。

令和元年十一月、六十周年記念祝賀会でお会いするのを期待していましたが、進藤さんも保坂さんも、体調不良で参加できず、とても残念でした。設立会員・名誉顧問の出席は、私一人だけでした。

令和三年十二月に保坂名誉顧問が、令和四年一月には、進藤名誉顧問が幽界に旅立たれてしまいました。

ここで改めて、ご功績に対して

心より感謝申し上げますと共に、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。(合掌)

- 進藤 昭氏 永年会員
- 支部設立会員・名誉顧問
- 昭和三十三年九月入会
- 会員番号 四七六〇
- 昭和四十四年度〜五十六年度 監事
- 昭和五十七年度〜平成元年度 委員
- 平成二年度〜平成十年度 副支部長
- 平成十一年度〜 顧問
- 平成十九年度〜 名誉顧問
- 平成二十年十二月 永年会員
- 令和四年一月二日逝去 (享年九十五才)



H.21.6 長岩嘉悦写真展会場で支部会員と共に
前列右から2番目進藤氏 3番目長岩

進藤昭名誉顧問を想う 佐々木民秀

進藤昭さんが亡くなったのは、浴室で倒れ救急入院されたが、まるで眠るがごとく逝ってしまったと奥さんから知らされた。

人一倍人望篤く、いつもニコニコと物静かに接して下さり、支部活動に特段のご支援・尽力をして頂いてきた。いつものあの笑顔が目に浮かぶ。

進藤さんは幼少の頃は山形県で育ち、特にスキー技術には優れ、戦後いち早く蔵王や鳥海山をホームグラウンドとして楽しまれたようである。

創立された初期の秋田岳連に於いても登山技術の指導に当たるなど登山活動に尽力されてきた。

平成元年には岡田支部長の下に副支部長となり、その退任後にも各周年記念事業等に多大なる貢献を頂き感謝を申し上げたい。

思い出に残る山行としては、進藤さんがホームグラウンドとして登り、親しまれた笹ヶ岳、また、自宅すぐ近くの日本一低い富士山での花見、そして平成十九年の田代岳では、晴天の下に「岩木山の奥に山がうつすらと見えるが、見えるか？」と問うと、八十才を過ぎた進藤さんは「オレにはドーンと目の前にあの世の山が見える…」

で一同大笑い…。
明田富士山の山頂で、進藤さん差し入れのお弁当を、皆で広げたことも懐かしい。

また、山行の度に趣味で始めた「帆立の燻製」を差し入れて下さり、色々とお世話下さった事思ひ出が多い。

進藤さんは終戦直前の頃、中島飛行場に勤務(奇縁にも私の姉も女子挺身隊として勤労)、戦後国鉄に入社し、国見峠近くの笹森山にマイクローエーヴの建設に従事していた事など、訪宅の度に昔話を聞かせて頂いた。

最後に、これまでのご厚情に感謝申し上げ、衷心よりご冥福をお祈りいたします。(合掌)



H.21.11 50周年記念祝賀会でカプセルをオープン
進藤名誉顧問 佐々木

太平山歩道整備報告 鎌田倫夫

令和四年度の公益的事業・太平山歩道整備を、十月二十九日(土)に行った。

集合場所の二手の又登山口には八名の参加者と、激励に駆け付けた堀井弘顧問が集まった。

堀井顧問は十日二日、高橋忠雄会員と共に、二手ノ又登山口に設置しているベンチの補修を行って、ベンチはペンキも塗られて綺麗だった。

佐々木民秀顧問は一足先に出発。午前八時、三台の草刈り機を先頭に前岳経由で中岳を目指す。

十時三十分、中岳に到着し、支障木の処理をしている佐々木顧問と合流。

二年ぶりの中岳の刈払いである。草木が生い茂り、放っておくと数年後にはどうなる事かと想像した。神社裏手の展望台は、有志の支障木処理作業により、太平山奥岳が望めるようになっていた。

一時間程で神社の周りは綺麗に刈払われ、茂みの中の三角点も顔を出したところで、早めの昼食とした。

心配していた天候も回復し、支障木の処理により、秋田市内の眺望、そして周辺の紅葉が見事であった。

つた。
下山は、昨年刈払いを行ったが、もう草木の伸びてしまった、三角井戸から前岳女人堂までの手直しをしながら下る。

女人堂では祠や鳥居の周辺を登山者がゆつくりと休憩出来るように刈払った。

午後三時、二手の又登山口に到着する頃に小雨が降り始めたが、全員無事に下山。参加者のご協力、今年度の歩道整備は無事に終了した。

参加者 佐々木民秀 鈴木裕子

鎌田倫夫 柴田勸

安藤金栄 歩仁内昌樹、

三浦昭男、小松芳美

会員外 戸松好造



刈払われた中岳神社前広場で集合写真

鳥海山山岳古道調査報告 佐藤助雄

鳥海山古道について十月十七日に、本部から高橋潤一氏が参加して現地調査を行い、鳥海古道の一端を感じ取って頂いたと思います。

当日は、小雨が混じるあいにくの天候でしたが、地元矢島山岳会からも三名の参加協力を得て、特徴的なコースを二か所程歩きながら説明させて頂きました。例年よりも紅葉の時期が若干遅れた関係もあり、当日は鳥海山の紅葉も拝見して貰う事が出来ました。

雨脚も強くなつたところで、途中の休憩所で、図面や探索会用の資料等で説明しながら、今までの調査の不備や、今後の調査の進め方の指導を受ける事も出来ました。自分を含めて、初めての事業でもあり、全く先が読めない状況で、今回の古道調査を簡単に引き受けてしまった事に対して、非常に後悔し、不安な気持ちで沸き上がってきたのが本音であります。

その後、鳥海山矢島口の古道調査の中核を担ってきた矢島山岳会員と何度か協議し、まずは降雪前に行わなければならない事項として、GPSでの現地調査やポイントとなる地点の写真撮影から始める事となりました。

GPSデータを取得されたもの

の、自分のパソコンでは、ソフトをダウンロード出来なくて、若手に引き続き作業を進めてもらい、写真の整理やポイントとなる地点の説明資料の作製等、数人での作業分担を行いながら、成果を少しでも早く仕上げたいと考えているのが現在の状況であります。

矢島山岳会では、七年前から鳥海修験道(古道)の復元を行い、探索会を開催して、古の鳥海山を楽しんで貰っています。

最初は、地元小学生を対象としたPTA事業に端を発した物で、若い会員が「古道を復元したい」との強い要望で、我々古参の会員が同調しての事業でした。

三十年以上も前には、観光行政で刈払い作業を行っていました。もはやジャングル状態の藪になり、古道を実際に歩行した会員も高齢となり、心配な事だらけでした。

しかしながら、若い会員の強い気持ちを感じられ、未開の地に踏み込む事を喜びに変えて挑む事が出来、矢島山岳会での主要事業の一つになったことも事実でした。

ジャングル状態の藪を正に泳ぐように進む事で、私自身もサングラス二個、腰なた二本紛失し、時には、先頭に立って道先案内して

いた自分の後に誰も居なくなつて、鳥海山の山懐奥に、只独りぼつちの笑えない状態の時もありました。当然ながら、携帯電話も通じません。先程まで聞こえていた草刈り機のエンジン音も全く聞こえませんでした。熊の中に一人置かれた感じでした。

何はともあれ、毎年少しづつ古道を探しながら、復元しながら探索会を多くの方々から楽しんでいただき、山菜取りの方々や遭難防止にも役立っている現状です。

そんな中で、秋田支部の支部長に就任された佐藤和志氏からの強い要望での「鳥海山古道調査」でした。当矢島町出身で大恩のある佐藤支部長の要請とあらば、断ることも出来ず、また当矢島山岳会の活動状況の発表の機会と捉え、地元の象徴であります「国指定史跡・鳥海山」を全国で紹介する事に協力できる絶好の機会と前向きにとらえ、完成まで今少し時間を頂戴したいとおもいます。

成果品を納品するまで、本部には当然ながら、秋田支部の皆様のご協力が不可欠でありますので、今後ともご指導方よろしくお願ひ申し上げます。

参加者 佐藤助雄 三浦昭男

小松芳美 高橋潤一(本会)

矢島山岳会 三名



駒の王子碑



登拝道入口の標柱



小雨の中、出発前の説明

※全国山岳古道調査
日本山岳会百二十周年記念事業
調査期間は令和三〜令和七年度
全国で百二十の古道を調査予定

秋田街道山岳古道調査報告 畠山 靖

①国見峠の概要

国見峠は、秋田県仙北市田沢湖生保内と岩手県岩手郡雫石町橋場を結ぶ、県境を越える峠である。国見温泉の南にある笹森山の南側尾根の鞍部を越えることから、秋田佐竹藩と盛岡南部藩の藩境峠であった。両藩では、境目に番所を置いて往来を監視し、秋田と盛岡を結ぶ最短コースとしての役割を果たしてきた街道である。

②古道調査実施

十一月三日(木)、秋田支部と岩手支部が、五月に実施した仙岩峠の継続調査として国見峠の調査を合同で実施した。

③国見温泉から古道へ

国見温泉の南側から入山し、沢を渡って斜面を登り、ブナや朴の木の大葉が敷き詰められた落葉帯を抜けると、笹森山(九九四m)への分岐に至り、植生もダケカンバなど、高山帯樹木への変化を楽しみながら、登ってきた標高を感じることができる。

④従是北東盛岡領

笹森山山頂から二十分ほどで、

「従是北東盛岡領」の石柱に至る。ここは、秋田藩と盛岡藩との藩境石碑で、寛永十年(一六三三年)に幕府巡検使の見分によって決まったとの記録が残っている。ここから北東は、「三日月の丸くなるまで南部領」と伝えられ、

三日月の頃に南部領に入り、満月になっても、まだ南部領が続いていることから、南部領が広い大であったかを表わしている。

⑤難所の古道へ

「従是北東盛岡領」の石柱を出発するころから雨模様となり、全員、雨合羽に身を包み、いざクマザサが密生する古道へ。

尾根筋の道無き道を雨に打たれ、笹藪をかき分け、悪戦苦闘しながらの探求活動は、物好きといえどもそれまでだが、ここまで、ほとぼしの情熱を傾注できる山仲間を頼もしいと思うとともに、誇りに感じる事ができた山行であった。

⑥古道の早期復活を

調査に当たった秋田支部と岩手支部の会員が、昔から食糧や物資の流通を通じて、両県の交通の要であった仙岩峠と国見峠を調査したことにより、藪に埋もれて消えつつある古道を再整備し、新た

なコースとして復活させたいとの思いは、参加した関係者全員の願いであり、早期のコース整備を望むものである。

参加者 今野昌雄 歩仁内昌樹 三浦昭男 高橋吉一 畠山靖 サポート 佐藤和志 鈴木裕子 南八幡平山岳会 佐々木伸宏 岩手支部 阿部陽子 高橋勇一 高野修



土のぼつと一里塚 (平成3年設置)



「従是北東盛岡領」の石柱

令和四年度晩餐会開催される

十二月三日、東京京王プラザホテルで、三年ぶりに開催。参加者は三四四名。

古野会長の挨拶の後、物故会員への黙祷、新永年会員、新入会員の紹介等が行われた。

新型コロナウイルスの影響は、今、第八波が来つつあることから、静かな乾杯となった。

(会報「山」十二月号参照)

出席者 佐藤和志 今野昌雄

当日は、支部連絡会議が十時から同ホテルで開催され、佐藤和志支部長が出席。

十二月四日の懇親山行は「丹沢弘法山」参加者 今野昌雄

会務報告

○事務局会議

・十月三十一日午後一時、秋田市北部市民サービスセンターで開催。会報百二十四号、会員名簿、会員からの投稿等発送。他。

古道調査支払い等について協議。・令和五年一月十七日午後一時、秋田市北部市民サービスセンターで開催。

本会へ報告する「令和五年度予算、令和四年度決算」を協議。

出席者 鎌田倫夫 後藤浩二 三浦昭男 鈴木裕子 小松芳美